

## 「多文化社会とコミュニケーション」という科目の歴史的背景

近年、たくさんの大学で「多文化社会」や「多文化共生」という講義が開講されている。愛知県立大学は2009年度から「多文化社会におけるコミュニケーション」という授業を開講している(2014年度から「多文化社会とコミュニケーション」に)。わたしが学部生のころ(1998年から2002年まで)、そういった名前の授業はほとんどなかった。あったのは「異文化交流論」や「国際関係論」くらいのものだ。

日本で「多文化共生」というスローガンがひろく使用されるようになったのは、1995年の阪神大震災のあとだといわれている。それ以前は、英語圏からの輸入概念(翻訳語)としての「多文化主義(マルチカルチュラリズム)」という用語が使用されていた。

多文化主義にせよ、多文化共生にせよ、そこでイメージされているのは、「社会には、さまざまな文化が共存している」ということだ。

近代社会では、一つの国家を、「一つの言語」(国家語=国語)と「一つの文化」で統一することが理想とされてきた。しかし、現代社会では、そういった均質主義的(同化主義的)な社会観を反省し、さまざまな言語や文化が存在することを認知するようになった。多様性を抑圧するとか、一つに統一するのではなく、共存することを目標にかかげるようになった。かんたんに説明すると、このような歴史的背景がある。

「多文化社会」と名のつく授業のシラバスをみると、「外国人が増加したから」日本も「多文化社会になってきた」というような説明をしているものが確認できる。「多様性が外からやってくる」。それなら「それ以前」は均質だったのか? そうではないはずだ。安田敏朗(やすだ・としあき)はつぎのように議論している。

何が問題かといえば、学界や政策立案レベルもふくめて、多言語社会を新しい問題かのように捉える傾向である。…中略…つまりは、多言語性のない社会などなく、それをだれがどう捉えるか、という多言語性認識こそが問題なのである。新しい問題としてみる立場は、これまで存在してきた多言語性に気づかないか、あえて無視して議論をしている。それは「単一民族・単一言語国家日本」を前提としたものであり、帝国日本という歴史やその結果として存在しているマイノリティの問題、先住民族、少数民族、そしてその言語、また手話という言語の存在を捨象して、「単一民族・単一言語国家日本」が、異言語・異文化の人たちをあらたに「受け入れる」といった認識である。たとえば、『多言語社会がやってきた』という本は、「様々な民族が日本に移住してきて、急速に多言語社会になりつつある」という認識を示し、「そのことから、言語に関して数多くの問題が生じてきて」いるが、この問題は、「私たちが21世紀を生き抜いていくためには取り組まなければならない問題」なのだと述べる。ここで示される観点は、安定した「単一民族・単一言語国家日本」に「外部」から攪乱(かくらん)要素が入ってきた、だから対応しなければならない、というものである(やすだ2010:142)。

安田は「多言語社会」について論じているが、「多文化社会」「多文化共生」についても、おなじことがいえる。つまり、文化の多様性のない社会など存在しないという観点にたつなら、いつもどこでも、あらゆる社会は「多文化」であるといえるのである。

日本では敗戦後、「単一民族」という幻想がつけられた(おぐま1995)。近代の日本には、沖縄の人たち、東北の人たちの言語を「標準語」に「矯正」させた、同化政策の歴史がある。アイヌにも日本語と日本文化に同化させる政策をとった。日本列島で話されていた言語は地域ごとにちがいがあつたが標準語を強制した。植民地や占領地では、皇民化政策によって、日本の文化を強制した。

その歴史をふりかえることも、多文化社会としての日本をとらえなおす手がかりになるだろう。

## 多文化社会論の類型

ここで、いまある多文化社会論をいくつかの類型に整理してみたい。そうすることで、その論者が、どのような視点から多文化社会を論じているのかを確認することができるだろう。

ここでは、とりあげる内容についての類型（判断基準）をつくってみる。

1. ニューカマー中心の多文化社会論
2. オールドカマーの歴史をふまえて、オールドカマーとニューカマーの状況を論じた多文化社会論
3. いわゆる「外国人」だけでなく、先住民の権利についても論じている多文化社会論
4. 外国人や先住民などの民族的マイノリティについてだけでなく、そのほかのマイノリティにも着目した多文化社会論（オールドカマー：何世代にもわたって日本に定住している外国籍の住民のこと。ニューカマーは、1980年代以降など、比較的最近日本にきた外国籍住民のこと。くわしくは第5回で解説する）

## この授業でめざす「多文化」社会論について

この授業では、一般的にイメージされている「多文化」社会論よりも、幅ひろいテーマをとりあげる。また、「外国人」や「少数民族」のように、マイノリティに注目するというよりも、制度のありかた、マジョリティ（多数派）とマイノリティの関係のありかたに注目する。それは、わたしが独自に、勝手にしているわけではない。たとえば、中島智子（なかじま・ともこ）は『多文化教育』という本で、つぎのように説明している。

多文化教育においてキーワードとなるのは、多様な背景をもつ子どもであるが、それは必ずしも外国人＝外国籍の子どもを意味しない。多文化教育は、今日では民族や人種だけでなく、ジェンダーや社会経済的背景、障害者、高齢者、同性愛者など、社会において不利益を被（こうむ）る立場におかれる人々を含むのが一般的だ…後略…（なかじま1998:24）。

…多文化教育とは隠れたカリキュラムも含めた学校文化の見直しであり、文化を相対化する視点であり、社会との関与を意識するプロセスである。また、多文化教育においてはマイノリティを主な対象とするのではなく、アメリカやイギリスなどでは「白人」性が問題とされてきているように、マジョリティ自身が問われている。民族や文化のちがいを意識しにくい日本社会において、「日本人」性を意識する必要は逆に大きいと考えられる…後略…（28-29ページ）。

1998年に出版された本ですでに、このように多様な視点にたつことの重要性と、マジョリティのありかたを問うことの必要性が論じられている。おなじような視点は、1982年に出版されたネウストプニーの『外国人とのコミュニケーション』でも確認することができる。ネウストプニーはつぎのようにのべている。

私はここで人間の多様性の一つのあらわれである「外国人」に焦点を合わせ、この外国人が「我々」とコミュニケーションを行なう時、どのような問題に直面し、それをどう解決するかを考えてきた。外国人問題からの「脱出」は、ここでキーワードの一つである。外国人としての悩みを経験した人は、とにかく、その状態から抜け出たいという気持がある。これは当然の願望であろう。

しかし、この「脱出」説への反論もある。コミュニケーション、国際理解や国際行動のための教育によって、「外国人」の自己がしだいに失われ、国民性による差がなくなり、最終的には世界はなんのおもしろみもない、画一的なものになってしまうのではないか、それでいいのだろうか、という問題である。また、過渡期の人間は、どのような対策がとられようと、やはり悩むだろうという疑問もある。

…中略…すくなくともつぎの二つのことを考える必要がある。一つは、外国人の問題を社会の「異質集団」の問題という、より広い枠の中で再検討しなければならないという問題であり、もう一つは、これらの「異質集団」の性質が、人間の歴史とともにどのように変わってきたかを明らかにする、という問題である（ネウストプニー1982:166-167）。

わたしはネウストプニーが主張する「二つのこと」にほとんど賛同する。ただ、「国民性」などの表現は、現代的な視点からすれば適切ではないと感じる。文化を、国を単位にしてとらえた表現だからだ。ネウストプニーは、つぎのようにつづける。

社会の異質集団は、社会の「主流」と対立して存在している。たとえば、現在の日本社会では中央部に対して、辺地は依然として異質的なものと見なされがちである。同じく、男性に対して女性、中年層に対して子どもと老人、健康な人間に対して身体障害者、プロテスタントが多数を占める社会ではカトリック教徒、アメリカでは白

人に対して黒人などの例があげられる。民族的異質集団——つまり、少数民族、移民、一時的外国人、旅行者など——もやはり、社会の主流との対比では、異質集団である。

だれが主流で、だれが異質的かは、権力の問題であり、簡単に数とか、価値で決まるものではない。…中略…あらゆる社会において女性は半数が半数以上を上まわるグループなのに、社会の主流をなすのは、やはり男性である。問題は、数とか質ではなく、力関係である（167-168ページ）。

ネウストプニーのいう「異質集団」は、「マイノリティ（少数派）」といいかえることもできるだろう。マイノリティは、ただマイノリティなのではない。マジョリティ（多数派）との関係においてマイノリティであるのだ。ネウストプニーのいう「問題は、数とか質ではなく、力関係である」というのは、そういった意味である。

まとめると、この授業では、多様な人たちが共存している社会において、どのような人たちが不利な状況におかれているのか、それは、どのような力関係によるものなのかに注目する。

## 移民は「やってくる」だけなのか？ 日本からの移民の歴史

多言語や多文化を「外部からの移入」としてとらえることの問題については、藤井毅（ふじい・たけし）も「多文化社会をどうとらえるか」という論考で、同様の指摘をしている。

考えてみれば、明治から昭和前期にかけて、日本は、海外への移民送り出し国として、他国の社会に異文化を持ち込む主体として存在していたのではなかったか。確かに日本社会にポルトガル・ブラジル語話者が増大したことは、新現象であり、かつて経験したことがなかったものであるかもしれない。しかしながら、それを南米に渡った日系移民の歴史体験と切り離して考えてしまうと、日本社会が他者により一方的に変容を強いられているという見方を暗黙のうちに容認してしまうことになってしまうのではないか。

…中略…

こうしてみると、「多言語多文化社会がやってきた」という状況分析は、近現代日本がたどってきた歴史に触れずして、日本社会をあくまでも他者により影響を受けるだけの受動体としてとらえていることがわかってしまう。そこでは、他者に働きかける主体としての認識、あるいは、相互に影響を及ぼしあう存在という見方は、明らかに欠落している。その空白部に、「日本社会本来の姿が、外よりの影響で変わっていつてしまう」という見方が入り込み繁茂（はんも）するのは、容易なことである（ふじい2010:38-39）。

藤井の指摘は、いわゆる「外国人脅威論」の問題を示唆している。現在の日本で、排外主義的な主張をくりかえしている人たちがいる。その人たちは、たとえば横浜にある「海外移住資料館」で、鏡をみることになる。

海外移住資料館では、日本からの移民の歴史を展示している。そのなかには、日本人移民にたいするバッシング（いわゆる黄禍論（こうかるん））なども紹介している。太平洋戦争中のアメリカにおける日本人移民の強制収容についても紹介している。図書室には、『Caught in Between —故郷（くに）を失った人々』というドキュメンタリーのDVDがある（リナ・ホシノ監督、2004年）。2001年の9.11以後、アメリカでイスラム教徒やアラブ系住民にたいする国家的な迫害が開始されたことに対して、強制収容を経験した日系人たちが「歴史のあやまちをくりかえすな」と声をあげた。それを記録したドキュメンタリーだ。

ちなみに、おなじようなドキュメンタリーとして、2011年にNHKで放送された『渡辺謙（わたなべ・けん）アメリカに行く「9.11テロ」に立ち向かった日系人』がある。これは当時アメリカの運輸省長官だったノーマン・ミネタを取材したものだ。アメリカでは9.11後、アラブ系とイスラム系の飛行機の乗客には厳格な検査をするべきだという論調がわきおこった（人種プロファイリング）。ミネタはこれを拒否し、人種プロファイリングを実施させなかった。

強制収容をふくめた日系アメリカ人の歴史については、Denshoというウェブサイトが参考になる（<http://nikkeijin.densho.org>）。写真やインタビュー動画などが豊富にある。

## 1990年入管法の改正—日系人とその家族が日本へ

1990年の入管法改正で、日系3世とその家族に「定住者」という在留資格がみとめられた（2世は「日本人の配偶者等」という在留資格）。定住者というビザは自由に労働できるものであり、南米からの日系人労働者がふえることになった。これが「在日外国人が増加した」要因の一つである。

ここで、1990年代に出版された「多文化」に関する本の一部をみてみよう。

田中宏（たなか・ひろし） 1991 『在日外国人』岩波新書（→新版1995年、第三版2013年）  
中野秀一郎（なかの・ひでいちろう）／今津孝次郎（いまづ・こうじろう）編 1993 『エスニシティの社会学—日本社会の民族的構成』世界思想社（→2版1994年、3版1996年）  
マーハ、C. ジョン／本名信行（ほんな・のぶゆき）編 1994 『新しい日本観・世界観に向かって—日本における言語と文化の多様性』国際書院  
外国人地震情報センター編 1996 『阪神大震災と外国人—「多文化共生社会」の現状と可能性』明石書店  
三浦信孝（みうら・のぶたか）編 1997 『多言語主義とは何か』藤原書店  
中島智子（なかじま・ともこ）編 1998 『多文化教育—多様性のための教育学』明石書店  
言語権研究会編 1999 『ことばへの権利—言語権とはなにか』三元社

はたして、これまで、日本観や世界観をどれだけ「更新」することができたのだろうか。「多文化」の中身についてはどうだろうか。どれだけ充実させることができたのだろうか。

災害や防災に関していえば、最近のものとして『グローバル社会のコミュニティ防災—多文化共生のさきに』（よしとみ2013）という本がある。「ダイバーシティ（人の多様性）に配慮した避難所運営」 [http://blog.canpan.info/d\\_hinansho/](http://blog.canpan.info/d_hinansho/) というサイトも参考になる。

1996年に出版された『阪神大震災と外国人』では、「今後」の展望についてつぎのようにのべている。

外国人地震情報センターは〔1995年の一引用者注〕10月から多文化共生センターと名称を変え、日常的に活動を継続することを決めた。震災で私たちはさまざまな経験をし、さまざまなことを学んだが、外国人に限ってみても、震災で見えてきた問題は日常のものであった。情報不足、言葉のカベ、制度上のカベ、どれも災害時だけの問題ではない。私たちの日常へと返していききたい（203ページ）。

阪神大震災からこれまでのあいだに、どれだけの変化があったのか、そして、改善されていない問題とはなにかについて再検討する必要があるだろう。

また日系人については、日本のなかでも集住地域と非集住地域があり、集住地域には自治体による多文化施策がとられている場合もある。在日外国人のコミュニティが形成され、学校や宗教施設などの交流の場がある場合もある。日本各地のとりくみや状況にも注目する必要があるだろう。日系人だけでなく中国帰国者（中国残留日本人とその家族）の集住地域もある。

## 「鎖国」史観をといなおす

ここで、時代を近世にさかのぼってみる。一般的に「江戸時代は鎖国していた」と認識されている。しかし、歴史学の領域では『朝鮮通信使をよみなおす—「鎖国」史観を越えて』（なかお1996）、『「鎖国」という外交』（トビ2008）、『それでも江戸は鎖国だったのか—オランダ宿 日本橋長崎屋』（かたぎり2008）などの本がある。いずれも、従来いわれてきた「鎖国」史観をといなおす内容になっている。

ロナルド・トビは、歴史学における「鎖国」史観の変化（みなおし）をつぎのように説明している。

…「鎖国」が完成したとされた…中略…1640年以降の日本は、東アジアにおいて確固とした存在感をもっており、東アジアの発展と歩調を合わせていた。従来の「鎖国」論は、日本がアジアの一員であることを無視して、ヨーロッパとの関係だけを切り離して論じていたといえるだろう。しかし、明らかに日本は東アジアに対しては国を閉ざしてはいなかったし、ヨーロッパに対しても完全に閉ざしてはいなかったのである。

そして、1980年代以降活発になってきた「鎖国」をめぐる研究を通じて、今日では研究者レベルでは「鎖国」＝「国を完全に閉ざしていた」という認識はほとんど否定されているといっていいたいだろう。それを象徴するのが、千葉県佐倉市にある国立歴史民俗博物館（歴博）の総合展示第三展示室（近世）のリニューアルである。

筆者も監修者のひとりとして協力したこのリニューアルは、数年の準備期間を経て、2008年3月に公開された。この新たな近世展示では、「国際社会のなかの近世日本」というコーナーがまず入室者を迎える構成になっている。そして、長崎・対馬（つしま）・薩摩（さつま）・松前（まつまえ）という「四つの口」を通じて中国（明・清）・オランダ・朝鮮・琉球（りゅうきゅう）・蝦夷（えぞ）といった異国・異人たちと交流をもち、世

界とつながっていたという点が強調されている。説明書きでも、以前は「鎖国体制」という言葉が使われていたのに対して、リニューアル後は「近世日本は、『鎖国』をしていたと思われがちだが、東アジアのなかで孤立していたわけではない」などと、大きく変化している。

もちろん、近世日本が「鎖国」ではなかったとしても、完全に開かれていたわけではない。ただ、「鎖国」とされた近世日本の外交方針は、決して「国を閉ざす」という消極的なものではなく、江戸幕府が主体的に選択していったものなのである（トビ2008:19-20）。

現在、日本社会の閉鎖性を指摘し、それを問題視するとき、その閉鎖性の背景には「鎖国していた」ことにも原因があるという議論がある。これは、場合によっては、「そういった歴史があるから「仕方がない」という論理になってしまう。しかし、そもそも「鎖国」という認識そのものが歴史の一側面しかみていなかったということだ。田中優子（たなか・ゆうこ）は『グローバリゼーションの中の江戸』で「近代になって「開国」という言葉が生まれたことが「鎖国」観を生み出したと思われまます」と説明している（たなか2012:171）。

ちなみに、朝鮮通信使との交流の歴史を、いまでも継承している地域がある。たとえば、岡山県の牛窓（うしまど）は、朝鮮通信使が寄港していた町である。牛窓には、「海遊文化館」という朝鮮通信使についての歴史資料館があり、秋には「唐子踊り（からこおどり）」という祭りを開催している。『グローバリゼーションの中の江戸』によれば、名古屋の東照宮祭や大垣の祭、津市の八幡祭、鈴鹿市の祭、下関や牛窓の祭など、朝鮮通信使が通ったところ、通らなかったところ、さまざまな場所で朝鮮通信使にちなんだ山車（だし）や行列や踊りが、今でも生きているという（141-142ページ）。現在、「多文化フェスタ」や「多文化まつり」が日本の各地でおこなわれている。「唐子踊り」や「唐人おどり」は、その先がけといえるだろう。

## そもそも「歴史」ってなんだろう

さいごに、歴史について。成田龍一（なりた・りゅういち）は『近現代日本史と歴史学—書き換えられてきた過去』で、つぎのように「歴史」について説明している。

…歴史とは、ある解釈に基づいて出来事を選択し、さらにその出来事を意味づけて説明し、さらに叙述（じょじゅつ）するものということになります。本書ではこれを「歴史像」と呼んでいきます。

ここでの前提は、歴史と歴史学は別ということですが。歴史は無数の出来事の束から成っています。そのなかから重要な出来事を選び出し、関連づけ、意味づけて叙述し歴史像にしていくのが歴史学です。教科書はこうした歴史学によって解釈され叙述された歴史——実際には歴史像になりますが——を提示しているのです。

歴史学ではしばしば問題意識ということが強調されます。問題意識とは、歴史の無数の出来事のなかから、何を重要なものとするか、歴史のなかに何を求めるかということですが（なりた2012:ii）。

なんらかの問題意識をもつことなしに、「多文化社会」を論じることはできない。どのような問題意識にたち、なにに注目し、どのように論じるのか。大学のレポートも、研究論文も、ポイントはそこにある。問題を設定する、問いをたてることが大事だということだ。社会のなかの、たくさんの出来事のなかから、なにに注目し、それをどのような観点から論じるのか。

## 参考文献

- 蘭信三（あららぎ・しんぞう）編 2011 『帝国崩壊とひとの再移動—引揚げ、送還、そして残留』 勉誠出版  
伊豫谷登士翁（いよたに・としお）編 2013 『移動という経験—日本における「移民」研究の課題』 有信堂  
植田晃次（うへだ・こうじ）／山下仁（やました・ひとし）編 2006 『「共生」の内実—批判的社会言語学からの問いかけ』 三元社  
岡部一明（おかべ・かずあき） 1991 『日系アメリカ人 強制収容から戦後補償へ』 岩波ブックレット  
岡部牧夫（おかべ・まきお） 2002 『海を渡った日本人』 山川出版社  
荻野昌弘（おぎの・まさひろ）／蘭信三（あららぎ・しんぞう）編 2014 『3.11以前の社会学—阪神・淡路大震災から東日本大震災へ』 生活書院  
小熊英二（おぐま・えいじ） 1995 『単一民族神話の起源』 新曜社

片桐一男（かたぎり・かずお） 2008 『それでも江戸は鎖国だったのか』 吉川弘文館  
小宮まゆみ（こみや・まゆみ） 2009 『敵国人抑留一戦時下の外国民間人』 吉川弘文堂  
塩原良和（しおはら・よしかず） 2012 『共に生きる一多民族・多文化社会における対話』 弘文堂  
高橋幸春（たかはし・ゆきはる） 2008 『日系人の歴史を知ろう』 岩波ジュニア新書  
田中優子（たなか・ゆうこ） 2012 『グローバル化の中の江戸』 岩波ジュニア新書  
トビ、ロナルド 2008 『「鎖国」という外交』 小学館  
中尾宏（なかお・ひろし） 2006 『朝鮮通信使をよみなおす』 明石書店  
中島智子（なかじま・ともこ） 1998 「序 多文化教育の視点」 中島智子編 『多文化教育一多様性のための教育学』 明石書店、13-31  
成田龍一（なりた・りゅういち） 2012 『近現代日本史と歴史学—書き換えられてきた過去』 中公新書  
ネウストプニー、J.V. 1982 『外国人とのコミュニケーション』 岩波新書  
ひろた まさき／横田冬彦（よこた・ふゆひこ） 編 2011 『異文化交流史の再検討』 平凡社  
藤井毅（ふじい・たけし） 2010 「多文化社会をどうとらえるか」 『シリーズ多言語・多文化協働実践研究』 別冊3、37-44 (<http://hdl.handle.net/10108/63698>)  
安田敏朗（やすだ・としあき） 2010 「日本語政策史から見た言語政策の問題点」 田尻英三（たじり・えいぞう）／大津由紀雄（おおつ・ゆきお） 編 『言語政策を問う！』 ひつじ書房、133-147

## 用語解説

学校文化：学校における教員のありかた、学校の教育システム、カリキュラムや校則など、学校で当然視されているものと、規範を表現したもの。どちらかといえば、批判的な意味で使用する。

同化：不平等な関係においては、一方がもう一方に同化をせまられる。しかし同化にはおわりがない。権力をもつ側は、いつでもその同化の努力を無化して、出自を根拠に「他者化」したり、同化が不十分だと非難したりする。

日本からの移民：移民先は、ハワイ、グアム、北米／南米、植民地朝鮮・台湾、樺太（からふと）、「満洲国」、フィリピン、南洋諸島など。敗戦後、移住地、あるいは植民地・占領地から「引揚げ（ひきあげ）」した人たちがいる一方で、戦後に海外に移住した人もたくさんいる。参考になる資料館として、神戸市立海外移住と文化の交流センター、長野の満蒙開拓平和記念館、京都の「舞鶴（まいづる）引揚記念館」がある。和歌山市民図書館には移民資料室がある。

日系人強制収容問題：「第二次大戦中、アメリカは米国市民をふくむ12万人の日系人を内陸の収容所に抑留した」（おかべ1991:2）。この問題に関して、公民権運動（アフリカ系アメリカ人に対する差別撤廃をもとめた社会運動）の影響をうけた日系アメリカ人三世が中心となり、アメリカ政府に謝罪と補償をもとめた。アメリカ政府は1988年に公式に謝罪し、補償した。一方、戦時期に日本に滞在していた「敵国人」に日本がおこなったことについては、『敵国人抑留一戦時下の外国民間人』にくわしい（こみや2009）。捕虜に対する戦争犯罪については『レイルウェイ 運命の旅路』という映画がある。真田広之（さなだ・ひろゆき）が演じた通訳者の永瀬隆（ながせ・たかし）は実在の人物で、いろいろの本を出版している。

## より理解をふかめるために

- ・論文、雑誌記事検索サイトのサイニー (<http://ci.nii.ac.jp/>) で「移民」「多文化共生」などの関連用語を検索。
- ・書店や図書館にある「多文化」についての本が、どのような視点や内容で構成されているのか、もくじをチェック。

## 質問と紹介

日本における多文化教育について考察するとき、部落解放運動と同和教育の歴史を無視することはできない。しかし、同和教育は実施していた自治体と実施していない自治体がある。また、最近では「同和教育」ではなく別の名称で実施されていることもある。部落差別について、これまでどのようなこと、どのような場で学習してきましたか？

奈良の水平社博物館、大阪人権博物館（リバティおおさか）や三重県人権センターなど、部落差別について学習できる文化施設がいくつかある。

## コメントの紹介

…大学生になって電車通学をするようになると、さまざまな人を見るようになったが、この前、同じ学校の制服だと思われるのにズボンをはいている女子高生とスカートをはいている女子高生がしゃべっていた。日本の制服は「女はスカート」というのが普通だと思っていたが、この文化は変わりつつあるのかもしれないと思った。

【あべのコメント：えらべるようにしてほしいという要望があるので。台湾映画の『GF\*BF（女朋友。男朋友）』で生徒たちが学校に要求する場面がでてきます。おすすめ映画です。】

私は高校生のとき、国際クラスというクラスにおり、それには「多文化共生」という授業が週に2限ありました。その授業では主にグループワークで話し合っって発表したり、協力して何かを行うという内容でした。そこでの守るべきルールとして「否定をしないこと」がありました。受験のための授業が多い中で座学ではなく、そしてテストも無い特殊な授業でしたが、「異文化」は案外身近にあること、そして1高校のクラスの中でも多文化が共生していることが感じられ、無駄ではないものだったかなと思います。…後略…

文化ときくと長年続いてきたことや守っていかなければならないというようなイメージを勝手にもっていたが、問題としての文化という考え方があることを知り、たしかに、強豪校の運動部で多いと感じる指導としての体罰は問題としての文化に入るなと思いました。今は少し前と比べて体罰に関して周りの目が厳しくなっているので減ってきていると思うが、このように文化として当たり前であったことが変わるきっかけは何なのか知りたいと思った。…後略…

問題としての文化として、私は日本の中で男と女に対する考え方というものを思い浮かべる。日本の文化として言われ続けてきたのは「男は外で、女は家の中で働く」「夫の後ろを歩く妻が慎ましい」「男は男らしく、女は女らしく」などである。性別が異なるというだけで人間の価値の上下があったり、仕事内容が異なったりかなり差別してしまう文化が根強くあると思う。しかし、最近の日本では「働き方改革」「女社長」などの改善も多くみられる。私が近頃驚いたのはジュノンボーイコンテストでジェンダーレスの男の子がグランプリをとったことである。時代や環境、周囲の認識により文化は作り変えられていくものではないかと思われた。これからも変わりゆく文化の中で自分が生きていくと考えると楽しみでもある。

…私の出身県では赤飯に塩ではなく砂糖を大量にかけるということだ。幼少期は全世界の人が砂糖をかけるものだと思っていて、普通は塩だと知った時は衝撃だった。赤飯はめでたい時に食べるもので、昔の日本は塩が貴重だったから塩をかけていて、私の出身県では塩田がさかんで、逆に砂糖が貴重なので砂糖をかけるそうだ。赤飯はめでたい物だという共通認識が日本にはあるにもかかわらず、かける物にここまでの違いが生まれるのだと考えるととてもおもしろい。…後略…

私には富山出身の友人がいて、その友人から聞いた話なんですけど、富山の家庭には薬箱があって、その箱の中にはかぜ薬など入っていて、薬局に行かなくてもいいと言っていました。富山県は薬が有名だからなのかと言っていました…後略…

【あべのコメント：「ああ「置き薬」でしょ、最近CMみかける」と思ったんですが、検索してみると「置き薬の販売業は300年以上も前から富山で始まった商法です。」だそうです ([https://www.fujiyakuhin.co.jp/home\\_medicine/history.php](https://www.fujiyakuhin.co.jp/home_medicine/history.php))。おもしろいですね。】

食文化を見いだすポイントのうち、「どのように選択するか」が最も大きな文化差を生み出しているのではないかと考えました。人や物の移動、情報の伝達スピードや技術が発達した現代においては、他のポイントは大きな差は無いのではないかと。発展途上国は違うかもしれない。

【あべのコメント：冷蔵庫が普及するまえは保存食がひじょうに大事だった。どのように保存するか。発酵させて保存するものは、納豆、つけもの、しょうゆ、かつお節など、いろいろあります。乾燥させるものも。いまでは冷蔵庫があるし、新鮮なものを入手できますが、それでも保存食の文化は各地域の食文化を象徴しているように思います。】

学科旅行で、リバティおおさかに行きました。公害、いじめ、子ども、国籍etc 様々な人権について展示がなされていた中で、最も印象的であったのがLGBTについて。「性的マイノリティ」ではなく「性的バリエティ」だ、という考えは初めてであり、考え方・捉え方ひとつで差別が生じたり無くなったりするのだと思いました。

―――  
…留学生と夜ご飯を一緒に食べていた時にスプーンでおみそ汁を飲んでいて驚いた。他のおかずやご飯の時はしっかりとはしを使って食べていたので疑問に思って聞いてみたところ、スープ状のものに直接口をつけて飲む文化がないため、日本に来て長くはしの使い方も慣れていないが未だにみそ汁はスプーンで飲んでいると答えてくれた。

【あべのコメント：たとえば韓国では、キムチチゲなど、沸騰した状態で運ばれてくるので、口をつけるなんて無理です。手にもつことも危険。わかめスープは沸騰してないけど、スプーンで食べる。】

―――  
…文化を批判するとして、批判の中に・それが文化であるとまず理解すること・その上で何か学術的目線であったり、又は個人的経験からでもその文化の中の行為そのものに対する批判的な根拠をもつこと これら2点が必要だと感じました。ただ許容することだけが異文化理解ではないです。でも批判するならば、その中に理解は必ず必要だと今日の講義で改めて考えさせられました。

【あべのコメント：そうですね。で、この授業で主眼をおくのは、「他者の文化について考える」ことではなく、自分たちのありかたを問いなおしてみることです。】

―――  
私は、日本は多文化社会とはいえないと思います。日本にいて、外国人の方に会おうと上手にコミュニケーションがとれるか心配して離れたり、じろじろみたりと、あまりうけ入れない社会だと思ったからです。私自身がオーストラリアにホームステイに行った際に、スーパーで買い物をしていたら、積極的に話しかけられて、日本について聞かれて、受け入れようとしてくれたので、オーストラリアのような国こそ、多文化社会だと思います。…後略…  
本の読み方も、1通りに固定するのではなく、様々な読み方をするによって欲しい情報が効率よく手に入れられることが分かったので、自分に合った方法を見つけられることが、生活の中でも役に立つと思いました。…後略…

―――  
私のバイト先ではカエルとウサギがメニューにあります。けっこうおいしいらしいです。

―――  
…カエルやクジラなどある種「げてももの」についての話が出ましたが、愛知県の中学生以上の人はワニの肉やダチョウの肉を食べた経験のある人が多いと思います。というのも、愛知県の公立小中学校では、校外学習として「リトルワールド」というテーマパークに行くからです。そして、そこにダチョウの肉の焼き鳥やワニの肉の串焼きなどがあるので…後略…

―――  
鯨の質問は個人的にはビックリしました。山口では給食でも、家でも食べていたので同じ国でも食の選択にわりと差がでるんだなと思いました。地元のTVでは捕鯨に行く漁師さん達の安全を願うために昔行っていた演劇？のようなものの再現を小学生がやった。とかニュースで目にするのがあったのですが、鯨を食べ物だと思わない人達のほとんどはそういう伝統の行事とかも知らないんだ…と改めて考えてみると私の知っている世界ってまだまだ小さいなと思いました。…後略…

―――  
…2つのグループに分かれなきゃいけなかった時、私は「せーの、グッパで合わせ！」という風に言いましたが、まわりは全員違う言い方をしていました。「グーとパーで合わせ」とか、本当に様々でした。地域によって違いがあり、愛知県内でもいろいろでした。こんな小さな違いも多文化という風に言えるのでしょうか…？…後略…

【あべのコメント：1980年岡山市うまれの場合だと「ぐっぱらりーいーしゃーあった」です。文化です。】

―――  
…食文化についての「五つのポイント」について思ったことがあります。どのように食べるのかというところには、食べる手段（スプーンで）以外にも誰と食べるかや、イスラム圏でのラマダンなども入るのではないかと考えました。文化として家族全員で食べなければいけないという国があるとTV番組で見たことがあるからです。…後略…

―――  
私は辛いものが好きで花椒もとても好きだけど、日本では中華料理の店へ行っても、四川料理の店へ行ってもあまり麻のよくきいた料理を食べたことはありません。…中略…日本人向けにすごく改良されていると思います。…後略…

―――  
【あべのコメント：池袋、西川口など、ディープな中華料理が食べれる地域が都会にはあります。ちなみに、ほかの学生のコメントによると「名古屋駅から徒歩5分くらいの”杏亭”というお店」がオススメだそうです。】



よく「古典って何故学ぶの？ 意味がない」という高校生がいますが、僕は異文化交流の一つだと思う。現代と古典は文化が大きく違う。例えば現代では、許されない一夫多妻制があった。また、和歌のうまさや字のうまさガステータスの1つであった。このような文化の違いやいつなぜ一夫多妻制が許されなくなったのかなどを調べることで異文化を理解するまた文化ができた過程を知ることができると思う。…後略…

-----

…どの規模の集団であれば文化になるのでしょうか。…中略…家庭という小規模の集団にしか共有されていないものを「文化」と呼ぶのは、何だか大げさなような気がします。

【あべのコメント：明確な基準や境界線はありません。ただ、自分の家庭だけのことだと思っていたことが、じつは、あるグループで共有されているものだった、他の人たちもしていることだったということが、けっこうあります。】

-----

…私が「次の放課に運動靴ロッカーから持ってこないよ。」と言ったら、「放課後はもう授業終わっているよ。」と他県民に言われました。「放課」という言葉が伝わらなかった…後略…

-----

…この県大でも、愛知県出身の学生が多いせいで、他県から来た子が言葉をからかわれる場面を何度か見たことがあります。文化とまではいかないかもしれませんが、こういう風ちょうの一因に、多数派少数派の力関係がある気がします。

-----

非常勤講師は教授と呼ばれる事を嫌うと言っていたけれど、なぜ嫌なのか疑問に思ったし、他にどんな呼称があるのかと思った。…後略…

【あべのコメント：取引先の平社員を「社長」ってよびます？ 教授、准教授というのと非常勤講師は全然立場がちがいます。「さん」づけ、「教員」、「先生」以外の呼称はないです。】

-----

…寿司の中でも、外国人の方はタコやイカの寿司が苦手だときいたことがあります。…後略…

【あべのコメント：「外国人」というくくりは、あまりに大雑把です。タコやイカを食べない地域もあるし、食べる地域もある。その「外国人」が「欧米」の人をさすとしてもです。「外国」といっても多様です。そして日本も多様。】

-----

…私はそれぞれ文化があるのはいいことだしそのおかげで色々なことに気付けるとは思うけど、文化とか風潮に流されるのが好きじゃなくて、自分の考えが大切だと思うのでそのような視点でも学んでいきたいです。

-----

…一度山奥の田舎の祖父母の家でイナゴのつくだ煮を食べさせていただけの機会がありました。その時、祖父母やその知り合いの方々は平気な顔をして口に放りこんでいましたが、最後まで私は食べられず、一匹口に入れて吐き出してしまいました。味よりもイナゴを食べているという私の常識にはない行為に拒否反応が出たのだと思います。…後略…

-----

…蛙 [カエル] を始めとした、一般的には食べないと言われているものは、どうして食べるという文化ができないのか気になるので、知っているならば教えてほしいです。中にはおいしいものもあるので、一度でも食べれば根つきそうです。…後略…

【あべのコメント：日本でも食べていたけれども、文化として「すたれた」のです（たとえば、イヌを食べる文化もあった）。今でも日本のあちこちでカエルは食べれます。私もカラオケ屋で食べたことがあります。】

-----

やはり国内で文化が違います。日本についてあまり知らないが、自国も場所によって文化が違う。例えば、メキシコの北で料理はアメリカの影響があるので、チーズや牛ひき肉をよく使う。しかし、メキシコでよく使う材料はトマトやトウモロコシである。

…生まれも育ちも日本の私は、海外に出ると日本のことがもっとよくわかる、とよくいわれます。その文化に所属しているのにその文化を理解するのに外に出る必要がある。文化という概念は難しいなと思いました。…後略…

【あべのコメント：世界のなかの日本文化の位置づけという意味では、世界をしらないとわからない。見えてこない。「日本はこうだ」と思っている、日本の各地をあるきまわってみると、自分の「あたりまえ」は「あたりまえ」ではなかったことに気づきます。ひとつの日本の文化があるのではなく、多層的です。】

-----

問題としての文化の例にあるものは、日本の死刑制度だと思います。

海外からは反対意見を多く寄せられる中、日本国内には賛成意見もあります。人権問題の面から考えると死刑制度はとんでもないことだと思いますが、人の命の尊さを考えることにも繋がります。

-----

僕の趣味はゲームです。ゲームには色々ありますし、本当に感動できるもの、記憶に残るものもあります。単に暇つぶしのためのものもあります。それも友人と一緒にやれば記憶に残るものにもなるはずです。一方、煽情性・暴力性に力を入れたものもあります。皮肉なことですが人間とは複雑で、そういうものがストレスのはけ口にもなるのでしょう。

なので完全に否定する気はありません。ところで、暴力事件が発生したとき、メディアでゲームを一括りし、原因をゲームにするときがあります。その時は悲しくなりますね。高齢者の中ではゲームをやったことがない人も沢山いて、そういう報道を信じてしまってもおかしくありません。ゲームに本当に問題があるのか、これからそういう問題についてどうすれば解決できるのかを、考えていきたいと思います。

-----

…【問題としての文化】私が今まで聞いた中で最も衝撃的だった文化は、ヒンドゥー社会の文化、サティーです。サティーは、夫に先立たれた妻が、夫の亡骸と共に、生きたまま焼かれる儀式です。時が経つにつれ、この儀式を行うことは少なくなりましたが、今でも稀に行われています。この文化はまさに”問題としての文化”に当てはまるもので、17世紀、ムガル帝国の時代から、異教徒から批判的にとらえられていました。私も、この文化は絶対に無くならなければならないものだと思っています。無宗教である私には、宗教的な文化は理解が難しいものであるのは確かですが、無神論者としてではなく、人間として、私はこの文化を受け入れることができません。単なる宗教的文化ではなく、”問題としての文化”であるサティーは受け継がれるべき文化とは反対に、改められるべき文化であると考えます。

-----

以前、ニュースで、高校での髪型の規則について、厳しすぎる、とか、なぜ地毛なのに黒染めしないといけないのか、という話題が取り上げられていた。これについて、西欧の学校とかは、髪の毛なんて黒色以外の人がたくさんいて、それが普通なのに、日本は地毛でなければいけない、黒でなければいけない、という文化があるような気がしました。この高校の規則は、実際に日本が決められているのではなく、各々の高校が決められているものである、ということがわかりました。地毛が茶色なのに黒染めを強要された生徒もいるようでした。このような文化は、日本の問題としての文化なのではないか、と考えました。…後略…

-----